

「郷土」をめぐる時間形式

—沈從文と「不變の靜かな郷村」像—

津 守 陽

はじめに——郷村の時間は變化するか

沈從文（一九〇二〜八八）が故郷の湘西（湖南省西部）を描いた作品世界について、共通して用いられる評語に目立った二つの系列がある。ひとつは「昔と變わらない」「太古の」「古き良き」といった、いわば「不變」を示す言葉、もうひとつは「靜寂」「沈黙」といった、「靜けさ」を表す言葉である。典型的と思われるものについて、日本や中國における評論から擧げてみよう。

『邊城』の老渡守とその孫娘のさびしい運命は讀者の魂をある靜謐な太古の世界へみちびいて、ゆく。…（略）…太古の原初は、靜まりかえった沈黙と本能的な野生とが互いに牽引し合い平衡を保つて、一箇の美の世界を實現している。それは、文明人の郷愁の世界だ。日常不斷に神經をとがらしすり減らし、あくせく血眼になつて暮らしているわたしらにとつて、太古の美はなんと魅力的なものだろう。¹⁾

靜寂の中、突然響く河面の櫂の音、油工場の搾油棒がぶつかる轟音、それらが古く、悠長で悲しげな舟歌に和している。重々しい牛の角の音、水車が飛ぶように回りながら發する「ギイッ」というきしみ…²⁾

「靜か」な「太古の」世界、といった印象の妥當性を證明しようとするれば、沈從文自身が作中で漏らした感慨にその根據を求めることができ。代表作『邊城』の題記や『湘行散記』には、湘西の人々の暮らしを、昔から變わらぬ靜かな營みととらえる彼の言葉がある。

…（略）…この人々は根本的に歴史と全く關係をもたないかのようにもある。彼らの生存方法や感情を發散させる娛樂について見れば、今も昔も全く變わらず、何の差もないように思われる。この時私の目に映っている光景は、或いは二千年前の屈原が見たものと全く同じなのかもしれない。〔湘行散記〕「箱子岩」、一九三四³⁾

このような言葉を根據として、沈從文描く湘西世界を「時間や歴史の外に靜かに横たわっている」(劉洪濤⁵)、「古き良き」「不變の境地」(小島久代⁵)とみなすことは、沈從文研究者の間でも共通認識となっていると言つてよいだろう。そしてこれも作家自身が用いた概念である「常」と「變」を用いて、この不變の世界を「沈從文が確立した『常』であり、湘西の本質である」とみなすのも、凌宇に始まる共通した見方である。この場合「變」とは、小島氏によれば「二十年來の内戦と近代文明の侵入がもたらした悲劇、および農村經濟の破壊にともなう人心の荒廢など時代の波をかぶることによっておきる變化」を指すこととなる。

しかし作品に添えられた題記は、作家自身による注釋の一つに過ぎない。沈從文は一九二四年から二十數年にわたる創作生涯の中で、常にスタンスを變化させながら湘西を描き續けた。その中で湘西を萬古不變の世界とみなす感慨は、實は『湘行散記』を書いた三四年頃まで現れてこないものである。もし三四年の「邊城」題記や『湘行散記』のみをよりどころとして、湘西作品の全體像をも不變の鄉村世界と理解するのであれば、やや單純化の嫌いを免れないであろう。

そこで三四年に述べられた萬古不變の感慨をいったん離れ、沈の湘西作品から「不變」に關わる表現を見てみると、彼の描く世界が必ずしも一貫して「都市」めまぐるしく變化する近代文明「鄉村」悠久不變の靜かな世界」という二項對立の中にあつたわけではないことがわかる。また創作時期に沿つて時間に關する表現を追つていくと、彼の「時間」に對するとらえ方そのものに、ひとつの變遷が見えてくる。本稿では沈從文作品から時間に關する表現(以後時間表現と稱す)を追ひ、彼の表現技法が、一方で同時代の郷土文學に典型的な表現と共に

「郷土」をめぐる時間形式

通するところを持ちながらも、興味深い独自の發展を遂げたことを示したい。

なお本稿が考察對象とした「時間表現」と創作時期について、若干の説明を加えておきたい。時間表現という語が指す範圍は非常に廣いが、本稿では特に二點に絞つて考察を進めた。一つはジュネットが提示した「括復法」、すなわち數度の出來事を一度の語りで引き受ける技法について。もう一つは日付や時刻の挿入、天候の描寫などによつて表される物語内容の時間表現である。前者は物語内容の時間と物語言説のそれとの關係にかかわり、後者は物語内容のみにかかわる點でアンバランスではあるが、沈從文の特徴がよく現れているという意味でこの二點に重點を置くこととする。また「多產作家」と擲揄されたほど作品數の多い沈從文について、時間表現の全體像を詳細に把握することは困難である。本稿では凌宇の分期に従ひ、沈從文の創作生涯を「初期(一九二四～二七)」「過渡期(一九二八～三〇)」「成熟期(一九三一～三八)」「後期(一九三九～四九)」と區分して段階ごとの特徴を探つてみたい。但しこの四期のうち、後期においては湘西作品および小説類の執筆數がぐつと減り、創作の中心は哲學性の高い散文類へと移る。本稿では湘西を舞臺とした小説類を主に考察するため、ひとまず前三段階を對象とし、各時期の作品を取り上げながら流れを追ふこととする。

一、日付に刻まれる都會と追憶の鄉村

—「公寓中」と「市集」(一九二五)

さて、沈從文は兵士をやめて上京してきた北京で作家人生をスタートさせた。生活に苦しむ青年の鬱屈を描いた自傳的短編群が、彼の創作の始まりとなる。中野知洋が分析する通り、この最初期において沈從文は時間をはっきり意識したと考えられる。

公寓の中であわれな歳月を過ごしている。いつまでも續く抑鬱にまかせ、子どものように大泣きし、昏々と眠り、過去の毎日の時間を使い果たしてきた。日々はゆっくりと過ぎゆくわけではない、僕が上京してからの日にちを数えてみると、もう五ヶ月にもなっているのだ！（「公寓にて」〈公寓中〉、一九二五）

これは最も早く執筆された沈從文の作品「公寓中」の冒頭である。ここには、上京後の日数を指折り数える行爲によって、無爲に過ぎゆく時間への焦燥感を覚える主人公「僕」が描かれている。中野氏は「公寓中」が日記體で書かれていること、及び懐中時計の針が主人公を追い立てる描寫に着目し、日記と時計という近代のかつ都會的な小道具が、「都會」の「直線的で小刻み」な時間を形成し、「原初より」「邊境の田園世界における時の流れ」を有していた主人公をいらだたせていると指摘する。都會的な小道具が主人公の時間意識を際立たせているという點では筆者も氏の見解に賛同するが、少なくとも「公寓中」及び初期の自傳的作品群からは、主人公が本來田園の時間を有していたという設定は讀み取れない。中野氏はおそらく作品の自傳的性質から、沈從文自身の生い立ちと、のちに描かれることとなる湘西世界の「悠久不變」ぶりを、「公寓中」の主人公に投影したものと考える。この點で筆者は見解を異にするが、まずは「公寓中」に見える

もう一つの小道具、「日付」に着目することから論を進めたい。

「公寓中」は日記體小説である以上、當然の枠組みとして各段落末に日付が記されている。しかし北京滞在時期（一九二四—一九二七）の作品を見渡せば、共通する特徴として末尾に執筆の日付と場所が細かく記されていることがわかる。とりわけ初期に顯著なのが、節句や記念日に關連づけた日付記載だ。以下はその數例である（西曆と民國の年號が混在しているため、「民國」を補った）。

「公寓中」

「一クリスマス／慶華公寓にて」

「遙かな夜（遙夜）」（三）

「（民國）十三年大晦日——九二が去ってから二週間目」

「一日はこんな風に過ごした（一天是這樣度過過的）」

「（民國）十四年雙十節」

「從兄（堂兄）」

「元宵節前日 西山にて」

「黎明」

「從文が莽君の死の知らせを受け取った日」

「これからの僕（此後的的我）」

「十月雙十節の次の日 新窄而微小齋にて」

「中隊長（連長）」

「重陽節の五日後 北京にて」

記念日の中には、「黎明」のように作者の身近な人物にまつわるものもあり、初期の大半を占める一人稱の語りや日記體と相まって、作品の虚構性を薄め、自傳的色彩を強めている。こうした日付の記載は沈が上海に移住する一九二八年以後には少しずつ減少する。記念日へのこだわりは、作品中でもしばしば語られる。

今日は呪うべき、且つ愛すべき記念日だ。博愛を廣めて道に殉じたあのユダヤのひげ男の誕生日であり、雲南で帝國主義に反對する起義が起こった記念日でもある。…(略)…世の中の節句は樂しみ懐かしむべきものだけれど、僕にはいつだって縁が無いんだ！
(「公寓中」)

西洋から導入されたクリスマスや革命後に生まれた雙十節という記念日が、新しい制度の一つとして上京後間もない沈從文に強い印象を與えたであろうことは想像に難くない。初期作品中の記念日は日記や時計といった小道具と同様に、主人公の時間をくっきりと刻む「新しい」道具立ての役割を果たしている。

それでは、主人公の記念日への思い入れが浮き彫りにしているのは何か。それは上に引いた一段に見える「自分には縁がない」という感覺、すなわち他人には毎日きちんと一定のリズムで刻まれ、記念日によって定期的に樂しみを與えてくれる「時間」が、自分にだけは共有されていないという感覺による焦りである。「絶食以後」(一九二五)では、他人と自分とのこの違いが毎日同じように續くことで、さらなる苛立ちを示している(傍點は筆者による)。

計算してみたら今日は三日目の朝、頭は昨日よりは少し冴えているようだ、…(略)…昨日のこの時間、午前八時、彼は同じようにボロ蒲團から這い出して、…(略)…賑やかな一大通りそのもの賑やかに見える西單の牌樓は、彼のあまり定かでない酔っぱらいのようなぼんやりした目からは、全て何も變わらぬように見える。ついさっきとも、かつて見たのとも。サーベルを下げた褐

「郷土」をめぐる時間形式

色の制服の警察は、…(略)…表情が行き會う相手によってくると變化する、その様子が彼の前に見たのと寸分違わないのが、彼にはいぶかしく思われた。市場から出てきた中年の奥様方は、依然として昨日も買った茄子、魚、肉…(略)…を小籠に提げているだけでなく、やはり相變わらずゆったり焦らぬ足取りで歩いている。

この後も「依然」「相變わらず(仍然)」といった形容はしつこいほどに繰返される。この言葉が描き出すのは、人々の日常的な營みを、陳外感を持って見つめる主人公「彼」の眼差しである。交通整備の警官、買い物歸りの奥様方、スカートを翻す女性たち、鼻歌交じりに口上を述べる覗きからくりの藝人、スイカが並びはじめた果物屋の店先…。飢えた「彼」の眼前に展開する生き生きとした人々の生活は、彼が職探しに失敗した昨日と「何ら變わることがない(一絲不變)」がゆえに、彼にとっていっそう入り込む隙のない、「馴染みのない敵視」を帯びたものと感じられるのである。

ところがこの時期よく似た「いつもと同じように(照例)」という言葉を用いて描寫しながら、語り手がその情景にあふれる好意を示している作品がある。それが徐志摩に絶贊され、沈從文が故郷の湘西を次々と描ききつかけになっていったとされる「市場(市集)」(一九二五)である(傍點筆者)。

いつも、三と八の市には、例によってたくさん村人たちが集まる。小地主、鶏を買って町へ賣りに行く小商人、模様の布で頭を包み大きなイヤリングをさげたすっきり粋なミャオ族の娘、…

(略) …おのおの付近の村から来て賣り買ひするのだ。⁽⁵⁾

彼らはいつでもここにことかごを擔ぎ、あるいは背負いかごを背負い、青菜、大根、牛モツ、牛肉、鹽、豆腐、豚の腸……といったものをいっばいに詰め込んでゐる。手に提げるのは言わずとされた酒と油だ。⁽⁶⁾

この小品においても、「例によって〔照例〕」「いつでも〔總〕」という表現で、「すべての人が」「いつもと同じ日々を過ごしている」ことが繰り返し強調される。劉洪濤・吳曉東の兩氏が指摘するとおり、ここでは「例によって」という主張が繰り返し示されることで、一度しか語られなかったはずの内容が、今まで、そしてこれからも變わらず起こっていくであろうという事柄の複數の繼起を示す、ジュネット言うところの「括復法」の語りとなつてゐる。沈從文の湘西作品を讀んでゆけばわかるように、この括復法を常用した語りは、のちのち非常に多く現れてくる。現れる箇所は決まって冒頭に近い部分、ロケーションから土地の人情に至るまで、ガイドブックさながら湘西という舞臺を自慢げに紹介する箇所である。劉・吳兩氏はこうした箇所を指して地方誌小説・地域小説と位置づけ、これによって「萬古不變の」湘西世界を作り出したとしてゐる。⁽⁷⁾

ただし「市集」の世界には、三四年に見える「屈原の時代から變わらぬ」不變の湘西像とは異質なところがある。「市集」の語りの特徴を三點指摘し、その異質性を明らかにしたい。一點目は、「市集」の「照例」には、どの時點と比較して同じなのかというはっきりした時點の基準點が存在しないことである。「絶食以後」と「市集」を比べ

てみるとわかるように、前者は「依然」「一絲不變」などの表現で、語り手の現在の時間から見た光景が、昨日やさっきといった近い過去に見た情景と寸分違わぬことを示している。これに對して「市集」では、昨日や二千年前という比較對象を示すことなく、「照例」「總」「每個」という表現によってぼんやりと不變が主張されるに過ぎない。「市集」の世界は、語り手が根據無く「常態」であるとひとり確信している世界なのである。

この根據無き常態を支えるのが二點目の特徴、語られる「今」がどこに置かれてゐるのかを曖昧にする語りである。「市集」は「こまやかにそぼふる小雨が、天候が大きく變化する前の雪が降りそうで降らぬそんな時に、やはりそつと、ぱらぱらと落ちてきた」という表現で始まる。續く「この雨のために小さな田舎の廣場はすっぽり覆われ」、「いつもの三と八の市では…」という敘述から、市の立った或る一日の雨の情景を描いてゐるという設定が成り立ち、物語は過去時制で進み始める。ところが語り手が「あなた」を引き連れ、時制を攪亂する「もしも」の語りとともに長く介入することで、これ以後の時制は混亂し、曖昧になる。

市のざわめき、騒々しさは、南方(湖南以西)の田舎へ行ったことのある人なら誰でも知つてゐるものだ。／もしもあなたが遠い別の場所から聞いていたら、こうしたざわめきの起伏を、きつと早瀬に渦巻く水の音かと疑うことだろう!…(略)：町へ行けば、我々は小さな屋臺に商品がそれぞれ少しばかり並んでゐるのを目にするのみだ!だがここでは大いに違ふ。⁽⁸⁾

時制は過去に戻らぬまま市の描寫が續き、讀者は次第に、これは雨の降ったある一日の話ではなく、現在時制でとらえるべきスケッチなのだと感じ始める。ところがまた突然、冒頭の天氣につながる「冷たい雨が降っていたから」という句によって、讀者はある一日にしか降らなかったはずの雨に引き戻され、物語は一回性を帯びる。そして歸宅する人々の描寫を始めた語り手に安心して讀み進めていくと、最後に「我々はこのほかに、人からうらやましがられ、ほめたたえられる、美しくて艶やかで無邪氣な若いミヤオの娘さんと奥さんがたを大勢見る機會があるだろう」という、何とも時制の据わりを悪くする「我々」の語りが現れ、「市集」の世界は閉じられる。

以上二點の特徴は、過去や現在の時制が溶けた夢のような常態の世界を作り上げる。實際、「市集」は「故郷に歸る夢その一」という添え書きを持つことで、「夢」という枠の内側に制限されている。これが三點目の特徴である。初期湘西作品の多くは「むかしのこと〈往事〉」「夜釣り〈夜漁〉」のように、少年の日の思い出という枠組みを持つ。ここで一九二〇年代の郷土文學がしばしば幼年時の追憶という形をとったこと（許欽文「父の花園〈父親的花園〉」など）を想起してみると、沈從文も同様に追憶や夢といったユートピア的枠組みの中で不變の郷村世界を作り上げたことがわかる。

しかし例えば沈從文自身が影響を受けたと語る魯迅の郷村追憶ものから「宮芝居〈社戲〉」を見てみると、「社戲」が末尾の「そうなのだ、あれから今日まで、私はほんとうにあの夜ほどおいしい豆を食べたことがない」で追憶の基準點となる現在へ回歸してくるのに對し、沈從文の初期湘西世界は過去・現在・未來という時間の區切りを溶かしてしまったような異様な位相に存在している。言い換えれば、追憶とい

「郷土」をめぐる時間形式

う枠組みが現在を照射するための機能として働く同時代の郷土文學に對し、沈從文の初期湘西作品が描き出す夢は語り手の現在と交わりを持たない。この意味において、初期の不變の湘西像は、歴史の流れとの對照において述べられる『湘行散記』の感慨とは異質である。また「公寓中」と「市集」の時間が異なる表現をとったことは、沈從文本人が北京と湘西の時間を異なる感覚でとらえたことに起因すると思われるが、少なくとも作品中において、都市と郷村の時間は對置されることはなかった。筆者が初期都市小説における主人公の奇立ちを田園的時間からの乖離と讀む中野氏の見解に疑問を挾むのは、この點においてである。

二、郷村の日常に侵入する異常

—「山道中」「黔小景」（一九三〇年頃）

前章で確認したように、初期作品の湘西の時間は語りの現時點とは交わらない夢の枠内にある常態であり、作品内部にあるのは一種の止まった時間であった。それは都會の暮らしが日付を刻まれていたのとはっきりした對照を成している。ところが沈從文の湘西ものが成熟の度合いを高めた一九三〇年頃を見てみると、邊境の世界にも日付で區切られた進行する時間が訪れたことがわかる。「山道にて〈山道中〉」という短編の冒頭を見てみよう。

彼らは三人の同郷人、雲南の軍隊から暇をもらって家に歸るところであった。／八日目の道のりにさしかかったところで、三人の足は半分使い物にならなくなった。…（略）…山道であった！あと五日たてば貴陽に着くはずだ。…（略）…彼らはここまで八日

間歩き、〔貴陽までは〕あと五日、すなわちちようど十三の宿場であつた。⁽¹⁹⁾

雲南から貴陽を経て湘西へ向かう山中の道を、三人の兵士が歩いてゐる。彼らの數日間は、これまでの行程や目的地に着くまでの日數で刻まれる。これらの日數表示は本文中で繰り返し示され、三人の道中に一定のリズムを與える。また時折挾まれる時刻の描寫は、この物語が毎日刻まれていく日常の中の或る一日に設定されていることをしっかりと印象づける。

この時日はちようど正午であつた。：（略）：「分隊長、ここら是我々の田舎みたいですね。」「ここは湖南の境からまだ十七日も離れているさ。」「我々はあとどれくらい歩かにならんのですか?」「二十四日、二十二日か：もう半分近く歩いてきたな。：（略）：「貴陽まではあと何日で?」「八日ありや着くだろう。今日老坡寨で休んで、明日は楓林場、明後日が：」⁽²⁰⁾

こうした對話の積み重ねで、作品世界が時の止まった常態ではなく、スケジュール通りに進行する時間の中にあることが示される。

但し淡々と日付が刻まれるだけで何事も起こらなければ、「山道中」の世界は「市集」と大きく異ならなかつただろう。ところが最後の一段に至り、スケジュール通りに進む「山道中」の日常は一氣に轉覆する。道中に倦み疲れて休憩したがる若い仲間を叱りつつ、豫定通り宿に落ち着いた分隊長の一行は、翌朝驚くべき知らせを聞く。昨日しばしの休憩をとり、若い仲間がもう少し休もうと駄々をこねたその場所

に、追い剥ぎが出たというのだ。昨日共に語らつた紙商人は略奪され、二人連れの兵士は殺されたという。知らせを聞いた三人は、ただ「啞然とする」。もしもあの場所から一足先に出立していなかつたなら、難に遭つたのは彼ら自身であつただろう。「山道中」の物語は、日常の中に突然出現する異常を鮮やかに示している。但し異常な知らせの後、「この日もやはり旅路についた。彼らの故郷まではそこからまだ二十日もかかるのだ!」と續いて物語が結ばれることから、出現した異常によつてこの世界が劇的に悲劇へと轉換したわけではないことがわかる。日常に侵入してきた異常は、この邊境の世界にとつて完全に異質なものではなく、ただその存在に焦點があてられていなかったに過ぎない。いわば日常の中に姿を溶け込ませていた異常である。

淡々と進行してはたはずの日常に侵入する静かな異常、そこから違つた一面を見せはじめる世界というモチーフは、この時期の湘西・邊境ものに多く描かれている。邊境の町に駐屯し何氣ない日常を送る兵士が、田舎の青年が隠し持つ戀情の狂氣を垣間見る驚愕を描いた「三人の男と一人の女（三個男子和一個女人）」（一九三〇）。妻を遊女として出稼ぎに出し、誰もがすることとして疑問を覺えてこなかつた素朴な農夫が、妻に會いに町へ出て來たことで、この行爲の意味をついに理解し涙を流す「夫（丈夫）」（一九三〇）。戦火を避けて逗留する町で、父親と合流できることを期待しながら待つ少女に訪れる静かな夕暮れが、實は遠く離れた父の墓上にも訪れている「靜」（一九三三）。興味深いのは、この時期の沈從文の行く天候描寫に絡めた時間表現が、まるで物語の構造を象徴するかのようになり、静かでありながら不可解な異變を孕んでいることだ。二人の商人が貴州の鄙びた宿屋に泊まる一夜を描いた「貴州小景（黔小景）」（一九三一）には、印象深い黃

昏の情景が描かれる。

二人の商人は靴をつっかけ、戸口の椅子に腰掛けると、戸外の黄昏の景色を眺めた。空を眺め、山を眺め、道ばたに點々とある小さな畑を眺め：(略)：すべての色調がこの二人の心に引き起こした情緒は、他のどの折りに感じた情緒とも寸分變わらず、そのことに二人はやや驚きを覺えた。

しかしこの時、黄昏の景色はさらに美しく、夕晴れは病み上がりの人のように柔和で弱々しく、笑っているようでもあり、また憂いを帯びているように、沈黙して何も語らぬのであった。

この二箇所②の黄昏描寫は近接して現れるが、役割を異にする。一箇所目は、淡々と日々を送るように見える宿の主人が、實は息子を亡くしたばかりであり、二人の客になぜか「息子は商賣に行っています」と嘘をついてしまった箇所①の直後に挿入されている。「黔小景」の冒頭部には括復の語りが入り、この土地を行き來する商人たちは、たとえ夜中に虎の遠吠えや土匪の銅鑼の音が聞こえたとしても心を驚かせないことが常態として描かれる。ゆえに二人の客の目にも、黄昏はいつもとあまりにも變わらぬ風景として映る。これに對し、ことさら「しかしこの時」を始まりに挿入される二箇所目の黄昏は、王曉明が指摘する通り「意味深長な暗示」であり、「何かを背後に」隠しているように見える。二箇所目の黄昏描寫に續いて讀者だけに明かされるのは、二人の客が畑と思つて指さす先に、宿の主人が息子を埋めた土饅頭があるという奇妙な符合だ。この符合により、宿の主人の日常には息子

「郷土」をめぐる時間形式

の死と嘘という異常が存在し、二人の客にはそれが察知されていないことが暗示される。夜は更け、翌朝二人の客は主人が椅子にかけたままひっそりと亡くなつてゐることを發見する。再び旅立った二人の客について、語り手は「道中他の新しいことに會つたために、自然とこのこと(「主人の死」)を忘れてしまった」とさらりと書くものの、彼らの道中は宿に着く前と打つて變わつておぞましい情景に溢れはじめる。林中にくくりつけられた強盜の首。父や兄の生首を桑の木の下に秤棒で擔いでいく年端もいかない子ども。語り手は二人の客に起こつた變化を何も記さないが、宿での一泊を経た後、彼らの目を通してこれらの情景が描かれるようになるという物語の構造によって、日常に潜む異常に氣づくというモチーフが表現されている。

こうした沈從文の風景・時間描寫の特徴を他の郷土文學、例えば蹇先文「水葬」(一九二六)と比較してみると、その違いが郷村の「不變」に關わつてくることが窺える。「水葬」では、盗みを働いた駱毛ロウモウが村人により水葬の刑に處され、それを知らぬまま歸りを待ち續ける老母の姿が痛ましく描かれる。抵抗する駱毛の罵聲と村人の怒號の合間に挟まれるのは、「静まりかえった空」「無邊の靜謐」「清らかな竹林」の描寫であり、息子の歸りを待ちわびる老母を照らすのは「かすかな星の光」である。村を包み込む風景は人間世界の「動」を浮かび上がらせる「靜」であり、駱毛という個人に起こつたドラマは村の世界を何ら搖るがせることはない。同様の手法で、許傑「賊」(一九三五)は静かな月光の下にひっそりと眠る村の様子を冒頭と末尾に繰り返すことで、賊の侵入騒ぎを経た郷村世界の根本的な不變を示す。すなわち郷土文學における靜謐の風景は、夕焼けや夜空の描寫で物語世界の時間を進行させるだけでなく、個人に對峙する存在としての郷村

共同體の不變を象徴する役割を果たしている。讀者は時折挟まれる風景描寫に何度も目を轉じることで、ぶれのない「不變の鄉村」像を築いていくことができる。固陋な舊社會が個人に與える壓迫を暴くことが作品の目的である場合、鄉村の風景描寫はこの目的を陰ながら支えていると言えるだろう。

これに對し沈從文の黄昏描寫は、日常に口を開けた異界への裂け目を誘導する。まるでひとつの境界線を越えたかのように、語り手が黄昏に目を轉じた後に映る世界は、今までとどこか異なっている。つまりこの時期の沈從文描く湘西は、括復の語りで基礎に常態を保ちながら、進行する時間・裂け目を覗かせる日常・世界の變容といった要素を内包している。王曉明はこうした「暗影」を、鄉村描寫の詩情を覆い隠すとしてマイナスイメージでとらえる。しかし進行する時間と日常の中の裂け目がこの時期同時に描かれ始めたことは、沈從文の文學において、湘西の時間が生きて動き始める爲にはこの暗影が不可欠だったことを示唆している。

三、萬古不變の感慨と伸縮する時間

—「邊城」と「八駿圖」(一九三四年前後)

さて『湘行散記』の書かれる一九三四年頃に至ると、湘西が萬古不變であるという感慨が現れ、同時に時間が人間の営みの全てを變化させるのだという一見矛盾した感慨も見える。沈從文にこれらの感慨を吐かせた直接の契機は、三四年一月における十一年ぶりの歸郷である。歸郷途上で新婚の妻張兆和にせつせと書き送った手紙群が、『湘行散記』執筆時の材源となった。この旅路において、沈從文は絶え間なき河の流れと水邊の暮らして悠久の時を感じ取り(一九三四年一月十

八日)、思いがけない昔なじみに會って十數年の變化に衝撃を受ける(昔なじみ(老伴))「ある鼻自慢の友人へ一個愛惜鼻子的朋友」、以上三篇は共に『湘行散記』中の篇名)。「私は『時間』の意識に激しく横っ面を張られた」と記す沈從文は、以後「新と舊」などの小説で時代の變化に焦點をあて、また「時間」などのエッセイで時間に關する思索を展開するようになる。

同時期に連載が開始された代表作「邊城」にも、一定の言葉遣いで湘西の不變ぶりを表現した箇所が見える。それが頻繁に現れる「日々(日子)」という言葉である。第一・二章において、語り手は括復の語りをを用いて舞臺となる邊境の町を紹介する。そこに生きる人々の生活は、例えばこんな言葉で表現される。

すべてはいつも永遠にひっそりと静まりかえっており、あらゆる人々は毎日をこうした寂寞の中に過ごしていく。…(略)…この小さな町で生きている人はみな、自らの分相應の日々の中に、人間世界の愛憎に關する期待を抱いている。…(略)…四十日或いは五十日の間、舟の上で漂うあちら側(「水夫」と、岸邊にいるこちら側(「遊女」とは、共にぼんやりとひと山の日々を過ごし、…(略)…)

「邊城」の世界が不變のユートピアととらえられてきたのは、このような「ひと山の日々」を過ごす人々の描寫が大きく影響している。『湘行散記』の感慨と合わせて見れば、一九三四年という年は、後に公認される、歴史と無關係な悠久不變の鄉村像が沈從文文學において確立・定着した時期と見てよいだろう。

しかし實は「邊城」に用いられる「日子」という言葉には、もう一

つの用法がある。それが、主人公翠翠に關連する場面での「日子」である。この物語では三度の端午節を軸に、翠翠と儼送という少年少女の淡く純粹な戀が描かれる。筋立てが與える素朴な印象とは裏腹に、軸として用いる端午節の扱いといい、長い追憶の挿入といい、「邊城」は時間表現から見て相當凝った構成の作品だと言えるが、これらの仕掛けに關しては劉洪濤氏の丹念な研究があるのでそちらに譲り、筆者は「日子」に焦點をあてて分析することとした。²⁰⁾

初めに翠翠が渡し守の祖父と暮らしている間は、「爺と孫が暮らす日々」というように、「日子」の用法に「ひと山の日々」との違いはない。ところが翠翠の儼送に對する戀心がかすかに育ちはじめ、儼送の兄天保から來た縁談を儼送からのものと誤解して恥じらうあたりで、彼女は「日（日子）」が長くなったら、爺ちゃんの話も長くなった」と感じる。自分でも感知しかねるような淡い想いは、翠翠にそれまでになかった物思いを體驗させるようになる。沈從文の筆は、讀者が見過ぎすようなひどく抑えた描寫で、彼女の物思いの時間を表現する。

黄昏はいつものように柔らかく、美しく、靜かであった。しかし人が自分の前にある一切を考へるとき、やはりこの黄昏の中かすかなさびしさを感じ取るのだ。かくて、この日は苦痛なものとなった。翠翠は何かが缺けているように思った。まるでこの日が過ぎてゆくのをこの目で見ながら、新しい人事の上にそれを引き留めようとしてもかなわななうであった。²¹⁾

そして儼送・天保・翠翠それぞれの想いがうまくかみ合わないまま天保の水死という悲劇が訪れると、祖父と翠翠の「二人は相變わらず舟

「郷土」をめぐる時間形式

を渡して日々を送り」ながら、「埋め合わせることでできない」傷口ができたような感覺を覺える。やがて祖父さえも失って孤兒となった翠翠は、旅立ったまま歸ってこない儼送を待ちながら「一つ一つの日々を過ごして」いくのである。

ここから見えるのは、翠翠にとっての「日々」が、彼女の心の動きによって伸縮・變化する繊細なものであるという事實である。翠翠の時間は、歴史と無關係に「ぼんやりと過ぐす」、毎日の境界が不確かな「ひと山の」時間ではない。してみると「邊城」の世界は、後景に描かれた「不變」の理想郷の上に、主人公の内面の動きによって伸縮する時間という、ある意味で非常に近代的な装置が載せられていることとなる。もしも主人公翠翠が、例えば旅人や知識人といった邊境の地にとつての異邦人であつたなら、彼女の伸縮する時間は鄉村世界の不變と強い對照を形成することになつただろう。しかし筆者もかつて論證したことだが、翠翠はまぎれもなくこの湘西世界の代表者として造形されており、彼女と邊境の人々とは完全に立場を同じくする。すなわち「邊城」の描く湘西は、表面上は二千年前と同じ單調な時間を過ごしているながら、いざ内部へと沈潛すれば、ひとりの少女が伸縮する繊細な時間を有している、重層的な場として描かれているのである。「八駿圖」（一九三五）を見れば、こうした時間のとらえかたが都市ものにも共通するようになっていたことが窺える。「八駿圖」は青島の大學を舞臺に、都市の知識人の「抑壓された性心理」を風刺した小説と位置づけられてきた。主要テーマはそれに違はなく、この點についてはすでに中野徹が十分に論じている。²²⁾ 筆者が着目するのは、「八駿圖」に時間の仕掛けがされているという點である。「八駿圖」では多くの伏せ字が用いられているが、冒頭で主人公達士先生が青島に到

着する時刻も伏せられている。

達士先生が汽車を降りたのは午前×時二十分だった。：(略)：
用事はごく簡単に済み、一人で海邊の小さなレストランへ行くとうまい晝ご飯を食べた。宿舎に戻ってくると、すでに午後×時であつた。

ところが結末に近くなると、突然明確な時刻をもって達士先生の行動時刻が示されるようになる。

達士先生は簡単な電報を自分で電報局に行つて送り、時間を見るとまだ五時だった。：(略)：／十時二十分に達士先生は宿舎に戻つた。給仕の老王が學校から切符を取つてきて達士先生に言うには、夜十一時二十五分出發の汽車だから、十時半に車に乗れば間に合うとのことだった。

「八駿圖」におけるこの時刻表示の變化について、ここでひとつの解釋を提示してみたい。

「八駿圖」の前半では、給仕の「先生、今日は七月五日で…」という臺詞に始まり、二年前の七月五日の達士先生の日記や手紙の本文が挿入されるなど、年月日を中心とした時間表現が頻繁に行われる。作者は日記や手紙をうまく使いながら、主人公とフィアンセ、及び風刺對象となる同僚の七人の教授たちとの關係を描いてゆく。過去の三角關係を乗り越えて無事意中の人をフィアンセとしている達士先生は、自分だけは違つたとばかりに、同僚の教授たちを性抑壓による「病人」

と診斷する。そんな達士先生の頭を占めるのは、二年前や去年など、長いスパンの時間意識である。「青島に着いてから初めての黄昏」に過去への回想を觸發された達士先生は、「時間がつくる對照を目にし、やや茫然自失の體」となるも、目前の狀況に満足するかのようになつて、「微笑む」。

ところが達士先生の安定は後半に入ると次第におびやかされ始める。それを引き起こすのは、前半で唯一「一刹那」という時間表現で表現されていた、淡い黄色の服の女性である。教授庚の戀人らしきこの女性の後ろ姿は、長いスパンの時間に目を向けて安定している達士先生の心の中に刹那の印象を残す。そして達士先生が彼女に惹かれ始めるあたりから、小説には急に括復の語りが増え始めるのである(傍點筆者)。

：(略)：すなわち一人の美しい女性がいつも宿舎にやつてきて、經濟學者の庚を訪ねるのだった。：(略)：この女性はいつも宿舎に來ていたが、來てからは未だかつて聲を聞かせたことが無く、：(略)：この女性はいつも大聲で笑ふことなく、聲を高めて話すことなく、時に教授庚と一緒に出かけても、そうと靜かに出て行くので、足音以外は何の音も立てないのだった。：(略)：女性の特徴はその雙の瞳だった。それはまるでいつも人に警告し、注意を促しているようだった。

庚以外の六人を「病人」と診斷していた達士先生だが、病人ではないはずの庚と戀人の行動に注ぐ彼の間斷なき視線は、些か異常でさえある。達士先生はこの女性への想いを自己否定するが、「一瞥の間」し

か接觸の機會が無い彼女の出身や性格について、ひとり事細かに想像して見る彼の姿は、すでに「病人」だと言えるだろう。刹那の印象しか與えてくれない彼女の動向に「いつも」聞き耳を立てているような括復の語りは、長いスパンで安定していたはずの達士先生の時間を揺り動かす。達士先生は葛藤を断ち切るべく遠方のフィアンセに歸宅の電報を打つが、その直後から前述の通り具體的な時刻が地の文に現れ始める。達士先生の心の時計は時々刻々と動き始め、もはやフィアンセとの安定した時間へは後戻りできなくなったというわけである。結局、彼は「ちょっと病氣になった」と電報を打ち、歸省を延期することとなる。

達士先生の時間が年月から時々刻々と進むものへと變わる背後には、時間が人間の心理に應じて伸縮する相對的なものとらえる作家の眼差しがある。この意味で「八駿圖」は「邊城」における時間觀を共有していると言える。不貞に傾く主人公の心理が語りに埋め込まれた時間處理によって發動する凝った仕掛けは、沈從文の文學において時間表現が技巧として成熟した好例である。また「黔小景」から「邊城」「八駿圖」にかけて、黄昏の描寫が重要なポイントとして設定されていることは實に興味深い。複数の作品で黄昏の情景に格別の思い入れを抱いていたことは推測できる。その同じ黄昏が、「黔小景」では郷村の變容を導き、「邊城」「八駿圖」では人間の思索を誘發していることは、作者の創作の焦點が郷村社會の描出から次第に離れ、都市か郷村かに関わらぬ人間の内部へと目を凝らし始めたことを示している。

「郷土」をめぐる時間形式

おわりに

以上を整理すると、沈從文の時間表現は都會との接觸を契機として始まり、初期湘西作品において閉じた夢の世界としての「不變の郷村」を形作っていた。一九三〇年頃に至ると湘西の時間は動き始め、靜かな郷村は不可解な異常を隠し持つようになる。そして三四年頃には、作家の歸郷を契機に萬古不變の湘西像が確立し、同時に主人公の時間が心理に應じて伸縮するようになる。

初期から三〇年への變化は、沈從文にとつての湘西が、現在と隔絶した繪姿としての郷村から、内部に動きや複雑な隈をもつ立體的な世界として成立し始めたことを意味している。初期の湘西が現在と交わらぬ靜止畫であったのは、湘西作品がそもそも「故郷に戀い焦がれる」〔市集〕雜誌掲載時の「附告白」作者の憂悶を緩和する手段として描かれ始めたことに起因する。この意味において初期の湘西作品は、飢えと性欲に苦しむ自畫像を描くことで鬱憤を晴らした都市作品と表裏一體の關係にあった。都市と郷村の時間が作中で對置されなかったことからは、沈從文自身が、自己の心中における都市と郷村の對立に無自覺だったことが窺われる。つまり作者の憂悶と郷愁は描寫の對象としうるほど客觀視されておらず、それだけに彼の創作活動は鬱憤を晴らす行爲として切實であったと言える。しかし三〇年頃に至ると、沈從文における湘西は美しくも變化に乏しい初期の郷村像を脱し、人々が多様な生命の形式を展開する場へと變貌する。「市集」で風景の一部のように畫面を裝飾していた邊境の人々は、三〇年頃には生きて動く人物として登場するようになる。湘西はもはや作家の感傷を満足させるための道具ではなく、小説創作の表現對象として十分に對象化さ

れ、深みを備えてくる。

三四年に見える萬古不變の感慨と伸縮する時間は、更なる對象化を経て、沈從文の湘西像がある到達點へと達したことを示す。ここでは主人公以外の邊境の人々は再び後景に退き、風景と化す。「ひと山の日々」と括復法が強調する萬古不變の世界は、一見「市集」のユートピアの復活にも見える。しかし語り手以外には共有されない曖昧な「市集」の「いつも通り」とは異なり、屈原の時代から變わらぬという比較の基準點を明示することで、三四年の湘西はより強固な不變の形象として立ち現れてくる。言うなれば三四年の湘西は、讀者の普遍的な郷愁を刺激しうる、抽象化された「不變の鄉村」像である。筆者はかつて、「邊城」における少女の造形が、試行錯誤を経た上での「純粹無垢」な郷土像の完成を意味していたことを論じた^③。本稿で見つた「不變の鄉村」の抽象化も、沈從文の郷土像が三〇年頃の多様な展開を経て、三四年にひとつの極點へ達したことを示している。そして伸縮する時間が「邊城」と「八駿圖」の両方に現れたことは、抽象化した鄉村像が完成するのに伴い、作家の興味が都市と鄉村の區別を踏み越え、普遍的な「人間」という對象へ焦點を移してきたことを示唆する。後期の沈從文文學の主流から湘西世界が退却していく、その端緒がここには見え始めている。

めに、沈從文の湘西像は他の郷土文學が到達できなかったような陰影を含み、かえって魅力を増す。とりわけ伸縮する時間の表現には、筆者がかつて論じた「邊城」の人稱代名詞の用法と同様に、邊境の人々の内面をどのように描くのかを注意深く探る沈從文の姿を見ることが出来る^④。素朴な田舎の内面が時間すらも伸び縮みさせようという認識は、人間を描くという近代文學の課題と、これもまた近代の産物である郷土文學との交差點に生じた、希有な邂逅の一例である。そして伸縮する時間の仕掛けを理知的な遊戯のように提示する「八駿圖」と、靜謐の黄昏描寫に隠して暗示する「邊城」とを見比べたとき、後者が示す高度な敘情性と陰影の奧行きに、我々は沈從文という作家が湘西から汲み出した文學表現の豊かさを知るのである。

注

- (1) 椛山久雄「太古への郷愁」(松枝茂夫ほか譯『現代中國文學全集・沈從文篇』「月報」、一九五四)。
- (2) 靜寂中、突然響起河船拍打水面的槳聲、油坊里油錘與油榨相撞時爆發的聲響、伴和着古老、悠長而又悲涼的船歌與號子；沉沉的牛角聲、水車飛轉發出的「咿呀」聲……(凌宇『沈從文傳』、北京十月文藝出版社、一九八八年初版、二〇〇三年第二版)。
- (3) ……(略)……這些人根本上又似乎與歷史毫無關係。從他們應付生存的方法與排洩感情的娛樂上看來，竟好像今古相同，不分彼此。這時節我所眼見的光景，或許就與兩千年前屈原所見的完全一樣。(湘行散記・箱子岩「水星」二卷一期、一九三四年四月)
- (4) 劉洪濤『沈從文小說新論』、北京師範大學出版社、二〇〇五、一六八頁。
- (5) 小島久代『沈從文——人と作品』、汲古書院、一九九七、二二五及び

二一八頁。

(6) 前掲劉文獻一六九頁。

(7) 前掲小島文獻二二八頁。

(8) ジェラルド・ジュネット著、花輪光・和泉涼一譯『物語のディスクルー方法論の試み』Ⅲ 頻度」における「單起法／括復法」の項目を参照。ちなみに劉氏は前掲書第三章「沈從文小説の時間形式」において、沈從文作品の時間形式を事細かに分析し、括復法に着目している（本稿第一章で詳述）。筆者は括復法の分析では劉氏に完全に贊同するが、「邊城」の時間形式の解釋などの點で見解を異にする。

(9) 凌宇「編後記」（同編『沈從文小説選』人民文學出版社、一九八二年初版、一九九五年第二刷）四九四～四五頁。

(10) 中野知洋『沈從文小説研究』第一章「沈從文小説における時間描寫の一側面」とくにその北京滞在記の作品について」（博士論文、二〇〇一）

(11) 公寓中度着可憐歲月。藉着連續的抑鬱，小孩子般大哭，昏昏的長睡；消磨了過去的每一天時間。日子過的並不慢，單把我到京的日子來數一下，也就是五個月了！（『公寓中』『晨報副鐫』第一八～一九號、一九二五年一月三〇～三二日）

(12) 前掲中野論文、二一～二二頁。

(13) 今天是一個可詛咒又可愛的紀念日子。是宣傳博愛以身殉道那個猶太弱子的誕生日，是雲南反對帝制起義的紀念日……（略）……世上佳節足以尋娛樂與追懷的於我總無分了！

(14) 今天計算起來是第三天早上了，頭似乎反而比昨天倒清明了一點……（略）……當昨天這時，上午八點鐘，他是同樣的從那破被裏爬出……（略）……熱鬧着——像大街本身的確也熱鬧着的西單牌樓，在他不很清確如醉人的暈浮眼光下，一切還是一樣，同剛才，同往天。／曳着刀的黃衣警察……（略）……面孔引所遇的對方而時時變換，正同他以前所見若一絲不變，他

「鄉土」をめぐる時間形式

覺得是值得詫異的。從菜市場走出來的那些中年太太們，不但依然手中小籃內放着昨日所買的茄子，魚，肉……（略）……還仍然是那種閒適不忙的脚步。（『絕食以後』『晨報副鐫』第一二四〇～一二四二號、一九二五年八月四日～六日）

(15) ……（略）……照例的三八市集，還是照例的有好多好多鄉下人，小田主，買雞到城裡去賣的小販子，花幟頭大耳環風姿萬爽的苗姑娘……（略）……各從附近的鄉村來作買賣。（『市集』『燕大月刊』のち『京報・民衆文藝』一九二五年四月二一日。いま『沈從文全集』（北嶽文藝出版社、二〇〇二）第十一卷による）

(16) 他們總笑嘻嘻的擔着籬筐或背一個大竹背籠，滿裝上青菜，蘿蔔，牛肺，牛肝，牛肉，鹽，豆腐，豬腸子……一類東西。手上提的小竹筒不消說是酒與油。

(17) 前掲劉文獻一六四頁、および吳曉東『長河』中的傳媒符碼——沈從文的國家想像和現代想像』（『視界』第十二輯、二〇〇三年十一月）。

(18) 集上的騷動，吵吵鬧鬧，凡是到過南方（湖湘以西）鄉下的人，是都會知道的。／倘若你是由遠遠的另一處地方聽着，那種喧囂的起伏，你會疑心到是灘水流動的聲音了……（略）……到城裏時，我們所見到的東西，不過小攤子上每樣有點罷了！這裏可就大不相同。

(19) 他們是三個同鄉人，從雲南軍隊中辭了差，預備回家。／走到第八天的路。三個人的脚走成半跛了……（略）……是山路！再過五天應當到貴陽了……（略）……他們是已經走過八天了，還要五天，也正是十三站。（『山道中』、『小說月報』二十一卷十二號、一九三〇年十二月）

(20) 這時天正當午……（略）……什長，這裏像我們鄉下。……這裏還離湖南境十七天。『我們到底還要走多久？』二十四天，二十三天，……我們已經走小半了。……（略）……到貴陽要幾天？』八天就夠了。今天歇老坡寨，明天楓林場，後天……

(21) 兩個商人取了鞋子，到門邊凳子坐下，望到門外黃昏的景致。望到天，

二五五

望到山，望到對過路旁一些小小菜圃，：(略)：一切調子在這兩個人心中，引起的情緒，皆沒有同另外任何時節不同，而覺得稍稍驚訝。(「黔小景」『北斗』一卷三期，一九三二年十一月)

(22) 可是這時節，黃昏景致更美麗了，晚晴正如人病後新愈，柔和而十分脆弱，彷彿在笑着，彷彿有種憂愁，沉默無言。

(23) 王曉明「沉默無言」的暗影」(趙園主編『沈從文名作欣賞』中國和平出版社，一九九三、三〇三頁)。

(24) 『文學』五卷三號，一九三五年九月。

(25) 前揭王文學，三〇三、四頁。

(26) 「老伴」『文學』一卷四期，一九三四年八月。

(27) 一切總永遠那麼靜寂，所有人民每個日子皆在這種寂寞裏過去。：(略)：在這小城中生存的，各人也一定皆各在分定一份日子裏，懷了對於人事的愛憎有所期待著。：(略)：四十天或五十天，在船上的浮着的那一個，同在岸上的這一個，便皆呆着打發這一堆日子，：(略)：(「邊城」『國聞週報』第十一卷第一、十六期，一九三四年一月一日、四月二十三日)

(28) 前揭劉文獻，一五五、一五八頁。

(29) 黃昏照樣的溫柔，美麗，平靜。但一個人若體念到這個當前一切時，也就照樣的在這黃昏中會有點兒薄薄的淒涼。于是，這日子成爲痛苦的東西了。翠翠覺得好像缺少了什麼。好像眼見到這個日子過去了，想在一件新的人事上攀住牠，但不成。

(30) 拙論「沈從文的女性形象にひそむ「郷土」——白い女神か、黒い田舎娘か」『東方學』第一二三輯，二〇〇七年一月。

(31) 中野徹「『八駿圖』考——沈從文における、ある物語の成立——」『湘西』第三號，二〇〇一。

(32) 達士先生下火車時上午×點二十分。：(略)：事很簡便的辦完了，就獨自一人跑到海濱一個小餐館吃了一頓很好的午飯。回到住處時，已是下

午×點了。(沈從文「八駿圖」『八駿圖』、上海文化生活出版社、一九三五。中野徹が指摘するように、「八駿圖」は雜誌初出と同じ年に出版された單行本で大きく加筆修正されており、完成度は雜誌初出時よりも高い。よって單行本を底本とした。)

(33) 達士先生把一個簡短電報親自送到電報局拍發後，看看時間還只五點鐘。

：(略)：／十點二十分鐘達士先生回到了宿舍。／聽差老王從學校把車票取來，告給達士先生，晚上十一點二十五分開車，十點半上車不遲。

(34) ：(略)：就是有一個美麗女子常常來到寄宿舍，拜訪經濟學者庚。／：(略)：這女人既常常來到宿舍，且到來以後，從不聞一點聲息，：(略)

：這女人從不放聲大笑，不高聲說話，有時與教授庚一同出門，也靜靜的走去，除了腳步聲音便毫無聲響。：／女人的特點是一雙眼睛，它彷彿總時時刻刻警告人，提醒人。

(35) 注三〇に同じ。

(36) 拙論「人物呼稱にみる沈從文の「郷土」観——『邊城』を題材として——『野草』八二號、二〇〇八年八月。